太郎
石森延男

少年少女現代日本創作文学　5
太郎　定価　五六〇円

昭和四十四年六月二十日　第一刷発行

著　者　石森延男
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-十二-二十一
郵便番号　一一二
電話　東京(03)九四二-一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇

印刷所　共同印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
◎石森延男　昭和四十四年

N. D. C. 913
224p 23.8cm

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

****

少年少女現代日本創作文学

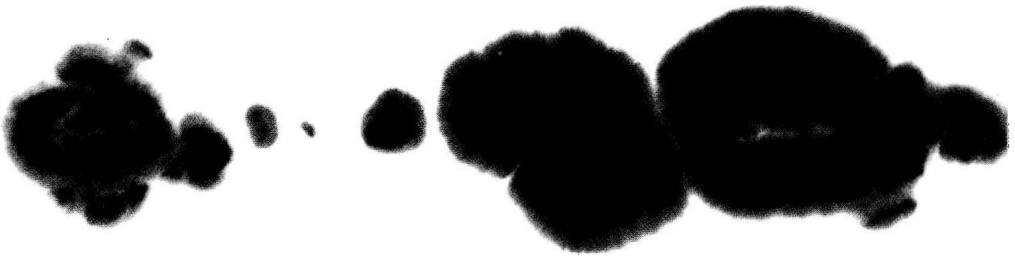
****

5

太　郎

石森延男 作

秋野卓美 絵

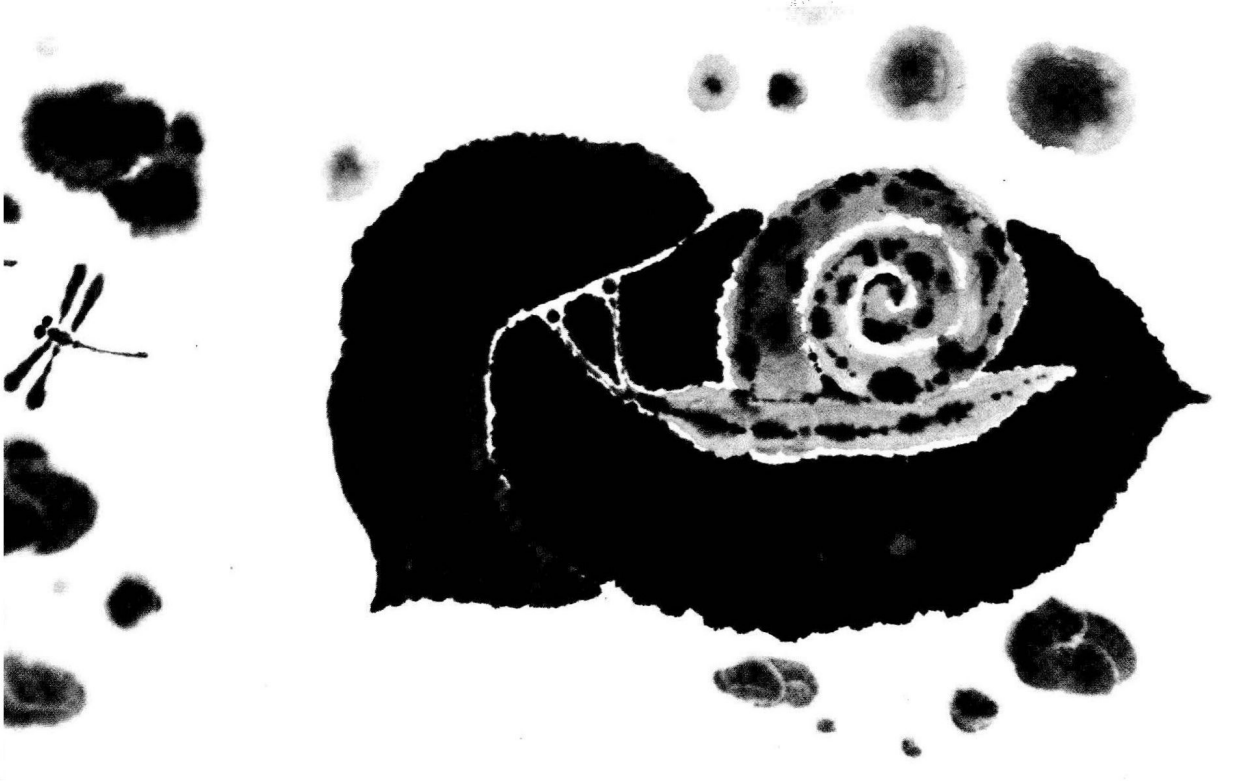


B04688

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

1 お天気のいい日曜なのに……10
2 「清し、この夜」……23
3 サボテン公園……38
4 学校クラブ……54
5 もみの大木……67
6 なかまはずれ……78



7 高原野菜……92
8 半分こにしたとうもろこし……105
9 心のスクリーン……121
10 サリドマイドの赤ちゃん……140
11 交通事故……158
12 うめぼしまぶた……174
13 目には見えないおみやげ……202

装本　辻村益朗

太

郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1　お天気のいい日曜なのに

「ママ、どこへいくの。」

太郎は、応接間のソファーにねころんでテレビを見ていながらこうさけんだ。なんの答えもない。母のカズ子が外出しようとして、お手つだいのひろ子に、なにかいいつけているところである。

カズ子は、まっ白なセーターに灰色のこまかいチェックのスラックスをはき、かみの毛を黒いリボンでたばねている。その服装をちらっと見て、太郎はすぐ、ははんとわかった。＜また自動車学校だな。＞それとわかっていたが、もういちど、

「どこへいくの。」

ときいてみた。

やはり応答なしだった。テレビの音が高いので、きこえないのかもしれない。太郎はそれきりもう声をかけなかった。

妹のマヤ子はバイオリンのけいこに出かけていって、まだもどってこない。日曜だというのに、いつも午前には、こうしてけいこにいくのである。

父親の定夫は、きまって週末のゴルフゆきで、ゆうべも、軽井沢どまりで、まだ帰ってこない。

太郎は、玄関まで出ていって、
「ママ、お昼に帰る？」
「わからないわよ。もうあと十回で、卒業するのよ、一生けんめいなんだから。それにきょうは、お友だちといっしょだし、おそくなるから、さきにお昼すませておいてね。マヤ子ももう帰るでしょ。ひろ子、あとたのむわよ。」
「はい。」
「おみやげ、買ってきてね。」
「なんです、小さな子どもみたいに。太郎、おまえ、五年生になってるのよ。」
「何年だって、おみやげは、おみやげだよ。」
「じゃ、いってきますよ。」
「いっていらっしゃい。」
ひろ子は、ていねいにあいさつをしたが、太郎は、なにもいわずに、さっさと応接間にひきかえし、またソファーにねころんだ。テレビはあいかわらず、やくざどもの切ったりはったりがつづいている。さもほんとうらしく立ちまわっているくせに、わざとらしくぶざまで、おもしろくもおかしくもない。といって、ほかのチャンネルは、ふざけたばかわらいか、あまったれた歌声か、はてしないコマーシャルのきいきい声——。＜よくもあきないで同じことを毎日くりかえしてるもんだ。何百回というつづきものさえある。やるほうもやるほうだが、見るほうも見るほうだ。＞太郎は、しかたなしに、やくざものをかけっぱなしにしているだけのこと。なにかが、かかっていないとおちつかない。騒音の中にいると、ふしぎとし

ずかな気持ちになれるからだ。＜おれも、いつのまにかテレビっ子になっちゃった。それはそうと、もうあと三十分もすれば、木村先生がやってくる。ああ、うるさいな。＞木村先生というのは、週に二度日曜と水曜にまわってくる家庭教師だ。バイクに乗って、風のように飛んでくる。風は気ままにふいてくるのに、木村先生の時間はじつに正しい。＜おれは、こんな天気のいい日曜に、外にも出られないで、午前中は勉強、午後はピアノだなんて、やりきれないや。マヤ子だってそうじゃないか。小学三年というのに、そら、絵だ、そら、バイオリンだ、そら、英語だって――。＞いつか、太郎が母に、いまから英語だなんて、マヤ子には、必要ないよっていったことがある。すると、母は、「語学は、小さいときほどいいのよ。大きくなったら、きっとよかったと思うにちがいないわ。太郎、おまえもやらないかい。」と、やりかえされてしまった。＜マヤ子はバイオリンやる気があっても、おれは、ピアノなんか、てんでやる気がないんだから――。＞

「木村先生、いらっしゃいましたよ。」

ひろ子が、太郎に声をかけた。＜ちょっきり定刻九時半だ。これから一時間がおれの番、そのあと一時間はマヤ子の番、まるで歯車みたい。＞

太郎は、ゆっくりソファーから起きて、テレビのスイッチを切り、二階のじぶんのへやにいく。待っていた木村先生が、

「さ、はじめよう。」

と、きまりきったことを、はんこでおすようにいいながら、古ぼけた黒かばんから、国語の教科書をとり

出す。

「きょうは漢字書き取りの練習をするよ。ノート出して。わたしの読む文をできるだけ漢字をはめて書くんだよ。」わからん漢字は、かたかなで書いておけという。わからないのが多いから、ほとんどかなの行列になる。ひととおりすむと、ノートを木村先生がとり上げて調べる。まるばつをつけて、もどしてくれる。点数までつけてある。百点満点で三十八点だった。

「このまえよりいくらかよくなった。でも、もうすこし書き取り練習するんだな。」

上げたり下げたり、いつもと同じご注意、なんどいわれてもなれっこになっているから、こちらにはこたえない。＜木村先生は、そんなことを知らんはずはないのにな。＞

つぎは、いま習っている国語教科書の文章を音読させられる。太郎はつっかかり、つっかかり、読みつづける。つっかかりついでに、ちらっと木村先生の顔をぬすみ見をする。ねむそうな目をして、じぶんの持っている教科書を見ている。＜ねむくなるのもあたりまえさ。このおれの読みざまだもの。おきのどくに、おれみたいなできないやつを、なにをすきこのんで教えにくるのだろう。それもこんなお天気のいい日曜なのに――。＞ いらないことを考えながら読むもので、なおさらろくな音読ができない。ともかくおしまいまで読んでしまうと、木村先生は、

「わからないことばは、ないか。」

と、追っかけるようにたずねる。＜さては、ねむっていなかったのかな。＞

「べつにありません。」

＜わからないことばなんか、一つや二つじゃすみやしないよ。そこらじゅうわからないだらけなんだも

ん。いちいちきいていたら時間オーバーになるもん。∨

「なければ、いま読んだ文章全体を、いくつに分けたらいいと思うかい。」

やつぎばやの質問である。太郎は、はじめの書きだしのところから、また、ふらふらと読みはじめる。

∧読んでも同じことだが、さも考えているかのようなそぶりでもしなくちゃ――。∨

「どうだ、わかったかい。」

∧せわしい木村先生だな。ちょっとぐらい待っててくれてもいいじゃないか。ははあ、ここで時間をのばされては、つぎのうちがおくれるから、それでいそぐんだな。∨

「さ、もう、わかったろう。五つか、六つか。」

∧いったい文章をぶつ切りして、どうしようというのだ。大きな牛肉なら切って食うというてもある。文章なんて読んでしまえば、それでいいものじゃないのか。ぶつ切りなんて役にもたたないよ、ナンセンスだよ。∨

「いくつの段落になるかね。」

追いうちをかけてくる。しかたがないので、太郎は、文章改行の数を目ですばやくさぐると十六ある。そこで、

「十六でしょう?」

「よく考えてみるんだな。」

「考えろったって――。」

「意味のつながっているところを、まとめるんだよ。」

＜それがにがてなんだ。目に見えない意味なんて、おれには、ようつかめん。＞ページをあっちめくり、こっちめくりしていると、

「よし、この文章はな、五つにくぎることができる。第一段は、ここ――。」

といって、木村先生は、太郎の教科書をのぞいて、えんぴつで、かぎの印をつける。二段は、ここからここまで、三段はここといいながら、かぎをつける。

「わかったな。」

＜てんでわかっちゃいないよ。＞

「じゃ、つぎは、算数の本、出して。」

太郎は置きどけいをちょっと見ると、あと二十五分ある。＜やれやれ。＞木村先生は、すばやく算数の教科書を出してから、いつものことばをまずいう。

「宿題はないか。もし宿題があれば、それをさきに勉強する。」

勉強するといっても、それは名ばかりで、どうせ太郎がやるのではない。ありがたいことに、木村先生が、ひとりでさっさとノートに式をたてたり計算をしたりしてくれる。それからきっと、「あとで、よくこの式と答えとを考えてみるんだよ。」という。いちどだって、それを実行したためしのない太郎である。習日学校に持っていって、宿題をそのまま出せば、受け持ちの吉岡先生にしかられずにすむというわけ。

「きょうは、ここの応用問題だったな。一番の問題からやっていこう。」

太郎は、ノートをひらき、えんぴつの心をけずり、鼻をかむ。なるべくゆっくり時間をかせぐ算段である。国語のたて書きの文章でさえ、つっかかる。まして、かっちりとした重量のある横書きの応用問題

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com